

166
202
203

1363

第三輯

新年を迎ふ

基督教の本質

基督教は日本の宗教となり得べきや

暗路の光

説教

祈禱

狂人の目的

福音の葉

余が死ざりしは

信ずるか故なり

題一千八百九十五年第一週祈禱表

家庭の

半兵衛の夢断

一寸一言

質問答義三件

基督教の基礎

新年を迎ふ

ア、榮光にみち。仁恵にとみ給ふ父なる神よ。

我儕に此美はとき。のちまとき新年を

すこやかに。さかんに迎へさせたまふを。

誠にかたじけなく感謝と奉る。

過ぎにし年に於て。我儕の心弱く。信仰鈍く。

しほし。又さまよい。

時としては失望の淵に沈んどせしときも。

父よ。あなたの御助はかぎりなくて。

父よ。われらの邦家をみるなはせたまへ。



一 基督教の本領には

平易明瞭に斯教の本義を發揮す。

一 暗路の光には

篤信家の説教。實驗。及び事跡を掲ぐ。

一 福音の環には

通俗的に聖書の妙趣を示摘す。

一 家庭の友には

小兒の爲め。又母の爲め。面白き短話
教訓を掲ぐ。

一 一寸一言には

基督教に關する質問答義を掲ぐ。

社 告

基督教の礎		毎月發行		定價	
行發	同壹	半ケ年	一ケ年	廣	告
壹	回	六册	十二册	金四錢五厘	郵五錢
壹	回	六册	十二册	金二十五錢	稅二十八錢
壹	回	六册	十二册	共	五十六錢

廣 告 (五號活字三十字詰)

○本誌は前金を得たる後遞送す
○郵便爲替は麴町郵便局へ御振込を乞ふ

發行所 麴町區上二番町十二番地 齊 月 堂

發賣所 京橋區出雲町一番地 警 醒 社 書 店

發行兼 麴町區上二番町十二番地 松 尾 音 次 郎

編輯人 牛込區上宮比町四番地 富 永 寛 容

印刷人 富 永 寛 容

今や開戦の真中よあり。

願くはあなたの大深心をもて。

此戦を最もよきにはからせ給へ。

而して結局御榮光が。

この東洋の天地に彌増るやうならせ給へ。

殊にわれらの邦をも憫みたまひて。

あなたの聖教の眞理をあらはさせ給へ。

動すれば血氣の勇にはやりて。

あなたの眞理を蔑視せんとする萌あれば。

願くは此時あなたの大能力をあらはとして。

ことごとく之を抜きはらひ給へ。

而してあなたの聖名を信する者をして。

一層愛と望と確信とに富み。

天下の罪惡にさからつて飽迄も屈せず。

常に誠を帯として腰に結び。

たゞときを護胸として胸にあて。

をだやかなる福音の備を靴として足にはき。

信仰の盾救の胃聖靈のつるぎ。

則ち神の道をとりにてよく戦はせ給へ。

父よ。而して此明治廿八年を。

われらが最も清く。貴く。有益に送らんが爲に。

その初にをいて。殊に祝福をたれさせ給へ。

又此最小一冊子を隣み玉ひて。

よくよく其主意を發揚するに堪させ給へ。われらあなたに依されは何事をもなす能はず。

只あなたによりてのみ生命あり。

願くは父よ。我儕のはかなきを憫み給ひて。

最も裕なる能力と智慧を惜みなく。

我儕の上に注がせ給はんことを
アーメン

基督教の本領

基督教は日本の宗教となり得べきや

問 基督教は日本の宗教となり得べきや。

答 此は大問題あり。かるくしく答へ難し。然りと雖

ども余は信ず。必ず日本の宗教となり得べきこと。

斯く申せば。或は以て我田に水を引くの私論ありと爲ん者もあるべし。されども余は決して私論を好まず。正々堂々として基督教を説くと欲するものなり。もし果して基督教にして人生に益なく、我日本の害とあり。我人民の不爲とあるものならば。余は之を排斥するに肯て吝ならざらんと欲す。蓋し宗教なるものは人間の爲の宗教にして

◎基督教の本領 (基督教は日本の宗教となり得べきや) 一

宗教の爲の人間にあらず。故に苟も人間に益あくして害あるが如きものならば之を排斥するに何かあらん固より當然の事と謂ふべし。然り而して余がこゝに基督教を指して日本の宗教とあり得べしと云ふものはろもく深き平細のあることにして決して一時の空想にあらず。則ち我國の益とあり。我民の幸となるもの。斯教を外にして他にこれあるべしとも覺へざる理由あればあり。ゆめく我田に水を引くの僻論となすべからず。

問 然らば問ふ其理由如何。

答 まづ第一基督教に眞價あること。第二日本在來の教に眞價乏しきこと。第三我日本に眞價充實する宗教を要すること。第四我國民はよく大宗教を嚆味同化するの力あること。第五世界的文明の趨勢は。

我國を驅つて基督教に入らむること等にして。言ひ更ふれば。基督教は我日本の宗教となるべき資格あり。又我日本は基督教を受けざるべからざるの必要あるを謂ふなり。

基督教の眞價とは。そのまことのねうちと云ふことにて。まことのねうちとは。其本性に固有する生命的の能力を云ふ。日本在來の宗教とは。重に神。儒。佛の三教を指し。其眞價乏しきとは。今日文明の教育を受けたる人民の道心を満足せしむるに足らざるをいふ。我日本に眞價ある宗教を要するとは。凡そ人間は宗教なくして立ちもかざる動物なれば。われら日本人も決して其數を免ること能はず。必ずまことの宗教を必要とするは論なきのみならず。殊に今日以後の日本には。一層眞正の宗教を要するの道理あるをいふ。大宗教を嚆味同化するの

力ありとは。われら同胞は。古より宗教を解するの力に富みて。随分種々雑多の教に接することありしも。よく之を噛み占め味ひ。以て其真意をさとりたれば。今後の基督教とても。必ずよく之を會得して。我物となすべきをいふ。世界的文明の趨勢云々とは。今日の文明力は。世界萬國を一つに丸めて。睦み親ましめ。彼我の長短をくらべて。互ひに相補益するの道に進ましむるものなれば。我國も世界に顔出したる以上。到底其滔々の文明力に反抗ふ能はず。随つて基督教の勢力にも反抗ふ能はずといふものは。基督教は此世界的文明の同伴者なればあり。

問 基督教の眞價あるところを一々聞かむ。

答 第一。基督教の起元より。今日までの歴史を見て知るべし。第二。其教理の普通にして。宇宙的なることを。第

三其教旨の實地的にして。須臾も離るべからざることを。第四。基督の至聖。至大なる人物のすることを。第五神の靈。人の靈に感動くことを。第六聖書の藏むるところ神の默示にいで。万世の規鑑たる事等を見て知るべし。

(一) 人の大畧承知する如く。基督教の起元は。實に微々たるものあり。則ち千八百有餘年のむかし。猶太國の一小村なざれの片隅に於て。大工の家に生れよ。まひ三十歳に到るまでは。父の家にありて。父の業を營み。肯へて常人と異あらざりし。一匹夫耶蘇が。眇然たる軀を以て。天國へ近志。悔改めよと宣へ傳へ。儼に漁師税關吏のともがら。十二人を集めて。弟子となし。三年の間こゝかしこと經廻りて。種々の困苦。迫害。罵詈譏諷の中に。身を置き。終に頑民の爲めに十字架につけられ。畢んぬ。

◎基督教の本領 (基督教は日本の宗教とあり得べきや) 五

これ其起元あり而して一旦の弟子もちりくゝに遁げ失せ殆んど斯
 教の根基を絶たに絶たなん計りの有様とは成たりき然るにいくばく
 もあくして彼の散りたるものもいゝ集り集る共に又信仰の心
 もをいゝ起り漸くにして一團体となりて社會に存する事とはな
 りしと雖ども其前途や尙遠遠にして危く弱く望み少なきものにて
 人間の目より到底世界の大宗教とあるべしともゆめをいはれざ
 りき然るにもろくの障碍を排し去て一步は一步より進み或は火
 の中水の中肉裂け血飛びあらゆる惨虐の中にありても所謂殉教者
 の血は教會の礎となりて愛と望と信仰の力はしばるに縛られずつ
 なぐに繋かれず壓へんと欲してますゝわがり消さんと欲してい
 よく燃え遂に紀元三百年の頃より羅馬の大帝國を着々感化し上
 天子より下庶人に到までを大抵歸依信隨せしめこれと同時に歐洲
 の各方へも滔々として其教化を布き及ぼせり以後數百年の間成程

幾多の弊害も混じりしと雖も又よくなるに起して宗教の
 大改革を行はしめ此一舉によりて歐洲全体の惰眠をさまし社會百
 般の事柄より學術技藝政治法律等に到るまでも悉く改善の運に向
 はしめこゝに近世文明の端緒を開きたり爾來基督教の勢力を駭々
 乎として止まる所を知らず時に盛衰の觀なきにしもあらずと雖ど
 もよく全歐を風靡して南北亞米利加に及び南洋諸島之云ふに及ば
 ず日本支那朝鮮にまで及びて尙底止する所を知らざるなり其間或
 はじよんはうあーどを起して監獄改良の大義を唱へしめ或はない
 ちんげーるを呼びをこじて赤十字社の根基をすええめ其他もろも
 ろの慈善事業社會改良事業外國傳道事業等を奮ひたゝしめてろの
 光輝燦爛たるものあり之を一々枚擧するに遑わらずと雖も其勢
 力の著大あるは疑ふべくもあらず願ふに其始かれが如く微にして
 其終かくの如く盛榮あるものは蓋し世に比類なかるべしこれ正し

●基督教の本領 (基督教は日本の宗教となり得べきや) 七

く斯教が其本性に固有する生命的の能力を証するものにして此能力則ち基督教の眞價たるなり。

(三)其教理の普通にして宇宙的なることとは、解し易く通じ易く時をえらばず處を問はず昔にも今にも西洋にも東洋にも學者にも無學者にも男にも女にも小兒にも老人にも野蠻にも文明にも寒國にも暖國にも大陸にも小陸にも何れの地何れの人種にも通用して聊かも障碍なきをいふ。宗教によりては學者には分れども無學者には分らざる、愚者には通すれども智者には通せず、我日本には貴けれども外國には貴からず、保守國には適すれども進歩國には適せず、閑々たる隱居者流には用あれども有爲壯年の者には不用ある者あり、唯基督教や普通にして宇宙的より何地いかなる時如何なる人にも凡て信する者よは之に權を賜て神の子とあし肯て誰彼の區別あるなし、是實に斯教の本性に固有する能力に外ならずして、此能力則ち基督教

の眞價たるなり。

(三)其教旨の實地的にして須臾も離るべからざることは譬へば渴して水を求め飢て食を慕ふが如きをいふ。即ちなくてはかなはぬものとの謂なり或は基督教を以て一切我身に關係なし全く餘處事ありと考ふものありと雖ども此の怪しからぬ誤想あり蓋し基督教は人道と人道の極意を示すものにて其本元天(神)にいで、更ふべからざる。日常必須の道たることは既に第一輯に於て論じたるが如し。而して人のこゝよ氣付かざるものは猶暗夜に挑燈かりし禮いふを知つて日々照し玉ふ日輪の禮いふを知らざるが如し。さりては情なきことなり夫れ基督教の眞價やこの人の日常欠くべからざるものたるの点に存す。

(四)基督の至聖至大なる人物なることは古來すでに定論あり佛國のるうろゝ如き反對論者すらも「基督の神の如くに死せり」と云へり。基

◎基督教の本領 (基督教は日本の宗教とあり得べきや) 九

督教は全く此人物の上に立つものにて。名つけて基督教といふは之
 が爲なり。此人物や人類の歴史を一變したりとは歴史家の証する所
 又基督教起つて以來幾億万人の信徒。彼を神人としてわがめまつり。彼
 に渴仰隨歸して其罪を救はれ。其靈生に入れられり。彼は實に神に立
 てられて我儕の智慧また義また聖き亦贖となり賜へるなり。此贖ひ
 や。他教の決して有つ能はざる所にして。特に基督教の専有する所なり。
 これを基督教眞價の最大要素なりとす。

(四) 神の靈人の靈に感動くとは基督教の奧義をいふ。保羅曰く。われ人
 の情は其中にある靈の外に誰か之を知るものあらんや。かくの如く。
 神の情ハ神の靈の外に知るものなしと。されば基督教の眞味。則ち神
 の秘奥に通せんとならば。神の靈を受けざるべからざること。猶天文
 學者が天文鏡を得ざるべからざるが如し。且又われらは常に神の情
 を究知るべきのみならず。直ちに神に接して其權能を受くべきあり。

もし此權能を受けざる時は。恰も葡萄の蔓が其幹より切離されたる
 如く。われら何事をもおす能はざるなり。又譬へば。鐵窓の中にとらは
 れ居る鷲の如し。彼れ万里を一飛びにするの天性ありと雖も。奈何
 せん。鐵窓の中に閉ちこめられては。又詮方もなし。而かも彼れ時あり
 てる。其鋭き眼を天の一方に注ぎ。かの青空をにらんで。將に飛んとし
 て能はず。悄然として物思はじげに翼を収むるよと見る間に。又もや
 暫くして。天性の本能。俄かに眼をさまし來るか。の如く。奮然として翼
 をひろげて。羽ばたきし。大ひに一躍を試んとするや。平生目にも見え
 ざる足の鐵鎖。頑然とじて堅く。からみて如何ともおす能はず。またま
 た悄然として坐るが如き。ア、此大空の鳥をして。自在に大空に飛揚
 せしむるものは誰の力ぞ。これ彼が自力にしわらずして。自力以上の
 力。則ち人の來つて其鐵鎖を切り。其鐵窓の戸を開くにあり。るもこれ
 吾人が人生に於ける實狀にあらずや。もとく。人間天真の靈は。直ち

に靈界に飛躍して神に直接するの性を有するものなりと雖ども罪と惡ともろくの肉慾煩腦とは乃ち鐵鎖となり鐵窓となりて以て我を引き据ゆたしんと欲すれば又引きすえ到底自ら如何ともなし能はざらしむ此際此時乃ち我を解きて自由自在に天上天下の靈界に飛ひ翔らしむるものはこれ只神靈のあるのみ夫れ神の聖靈人の靈性と相感動することまことに實事中の實事にして基督教の眞價則ちこゝにあつて存すと知るべし。

(六) 聖書は基督教の經典にして世界万世唯一の書あり其人心を啓發して本心と義務の光を照り輝かしめ神を畏れて其聖旨を悟り一視同仁四海兄弟の大義を知得せしむるもの此聖書に若くはあじむかし魯國は壓制の君主專制國なり貧困死に瀕するの奴隸其中よみちたりき大帝あれきさんぞる尙幼年にましませし時父帝にこらすの前にいでし甚だ沈思の姿ありき父帝怪んで其故を問ひ玉ふに

れなる奴隸の事おて候われ他日王位に即ん日には必ず彼等を救ふべしと答へ玉べり此答は父帝を初め列座の面々をいたく驚かしめ父帝問ふに何に由りて左る感想を起せしやを以てし玉ひしに答へて「聖書を読み凡ての人間は皆同胞兄弟ありとの教旨を深く肝銘したればなり」と果して此帝王位に即き玉ふに及んでや大ひに奴隸救助の道を定め玉へり聖書は帝王の心も憚らずして入ること此の如し聖書は聖靈の劍にして人の骨髓筋節までも突き通すありその單純平易にして而も莊重威嚴ある其妙味と純潔と光明と教智にみてる之を讀むこといよ久ふして但意味深長あるを覺ゆア、基督教眞價の存する所亦誰れか此聖書にあるを疑はんや。

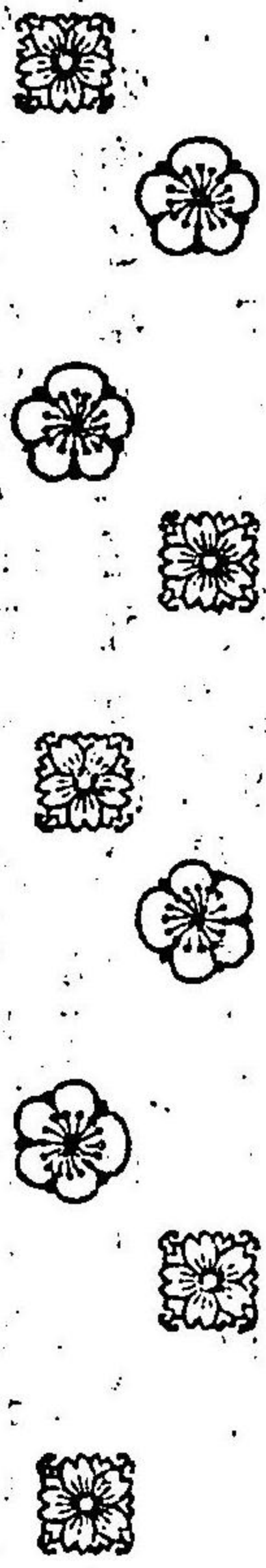
問 日本在來の宗教に眞價乏しき証據如何。
答 其証據歴々として見るべし。もく明治維新の改革と共に神儒佛教の上に非常なる衰頽を來し。殆

んど國民の眷顧を失として僅に其空名を擁するの様に陥りとは明白なる事實なり。

然るに最近六七年このかた國粹保存論の喧呼せらるゝと共に漸く再興の兆を現し引續ひて國家主義あるものゝ稱道せらるゝによりて一層其氣勢回復の便を得たりと雖ども斯る一時の人氣の頼むに足らざるハ誰しも承知のことなるべし。或人は之を以て燈火の將に滅んとして。パツと光を放つに比喩たり。其は兎も角も。今日の神儒佛教を見て。その勢力の増大をいふは皆過てり。余は徐ろに此等の諸教が今日國民の多數間に如何なる實事となり。如何なる動力となりて存在するやを知らんと欲す。言ひ更ふれば。僧侶若しくハ神官輩の口に喋々する所を聞ば。随分巧みなる議論をなし。いろ／＼六ヶ敷ことを云ふと雖ども。此は畢竟少數専門家の腦裡に止まり。一般大多數の信者に何の了解もなく。又影響もなく。事實に存せざる空物たるに過

ざれば。これ余輩の關する所もあらず。余輩之只實地につき。かの三教が其信者の肉となり。血となり。活きて動く所の能力を知らんと欲す。若しこれを知ることを得ば。其眞價の乏しきや否やは自ら明白とあらん。つらく佛敎の事實とあり。民間に現はるゝ所を察するに。其大多數の信者は。彌陀釋迦觀音勢至地藏等の塑像。圖畫を死者の靈牌と共に壇上に安置し。點燈供華し。何事を説るか知らざる。經偈を高誦し。彼岸于蘭盆葬時。年忌等には寺院に詣で。若しくは之を請待し。布施するものを與へて。經文を誦せしむるに過す。たまには教育ある人物の信仰するありと雖ども。概して文盲ある婦人。老人。隱人等なり。青年にして信する者あるが如きは。一時の好奇心。若しくは一種の學問として研究し。又ハ依て以て糊口せんとする者のみ。其道德的感化や。甚だ薄く。乏しくして。若しありとせば有爲の元氣を弱めて。涙もろくなさしむる位の事なり。又神道とても同じことにて。只幾等か勇しく自出

度と云ふ感覺を起さしむるの差あるのみ。儒道は道徳の實行を重んずと雖も、民間に行へること殆んど稀あるを奈何せん。之を要するに、日本在來の教は(一)多く形式に流れて一個の習慣とあり(二)道徳を言はざるのみさらざるも、之を實行せしむるの動力に乏しく(三)信仰は神佛より御利益を受くる爲のものなりとの觀念一般に行へれて其御利益の實徳に伴ふとの義を實地に解する者稀あり。且又(四)經文を熟讀して之を玩味する者少なく、殆んど經文なきに同じ(五)而して因襲の久しき、固陋狹隘無智排外の氣自ら之と連着して到底第二十世紀の文運と一致すべくもあらず。これ實地の觀察より、余輩が日本在來の教に眞價乏しといふ所以あり



暗路の光

説教

川本政之助

主及び其大なる能力に由て強くなるべし。

支那人は上古談に巧みあるものなり、かれらに誇大なる筆をもつて、在昔の英雄談、聖賢談をえがき出し、上代の大王の聖なる御代を稱揚す。堯舜の時代、三王の治世を賞讃す。歴代聖賢烈人の事跡を追思、嘆美を而して、現在事實上の生命に至ては、一般の氣風、このたびの戦争に由ても、畧知らるゝ如く、多くの不仁義と、多くの無節操と、多くの乱暴とを明らかたに顯す、その故に、彼等の多分は談話家なり、講談師の上手なるものなり、在昔上古の堯舜を夢みて、これを談する口の上の人なり、口の上の人は

事實上の勢力に遇ふときは、必ず敗亡す、キリスト在世時代の猶本人も、亦同様のことあり、彼等はダビデ王、ソロモン王の盛世を誇り、神の撰民、預言者の國なるをよろこぶと同時に、大いなる偽善と不義を以て、事實上の証跡を以て悪人たるを明示してキリストを殺したり、故に彼等も亦眞實ある活ける道德、生命的行為に於ては、單に空虚にして唯上古の聖王や、烈人の談話家、講釋師たりしなり、吾人キリストの徒たるものに、必用なるものは何ぞや、神の信者に向て望むところは、各人各個の中に、強大ある、生命的な能力、則ち肉と世と悪、たとに勝ち得て、神の御さるるなる聖と、義と、信と、愛と、聖靈によれる喜悅、平安にみちて、神の榮光を讃め、同胞兄弟を愛する所の、強健なる能力と、生命とを以て、事實上に於て、奸悪なる世に勝利を取るに、あるあり、若し信者にして、現在、自分自身の心中に、活けるキリストあり、聖靈より來る愛の熱火あり、して、徒に古の聖徒の歴史談を、あし、使徒の話や、ルーテル

ウエスレー、バンヤンの徒の履歷談を、あし、或は他國の名高き人の働きを話して、受け賣し、取次し、説法し、講釋して、喜びながら、自分自身の中心に、活存、現在し、玉ふ復活のキリスト、聖靈のあらはし、玉ふキリストあり、時に、乃ち支那人や、猶太人の好朋友にして、巧なる空想家、上手なる講釋師、口上人、幻影子なり、神は此の如きものを喜ぶ、玉はざるあり、さて、神が主及び、其大ひなる能力に、由て、強健くなるべしと、命じ、玉ひしは、右等の如き、幻影子たる病を、免れて、事實上の能力の人と、あらん爲め、あり、余は、左に、二三の眞理を、証明せん、第一、復活し、玉ひ、昇天し、玉ひし、キリストは、今の聖靈に、由て、吾人の心の中に、宿り、住ひ、玉ふ、キリストあり、此大ひなる主、キリストの、全能の主に、おらせ、玉ひながら、この吾人、如き、土塊の器の中に、來り、住ひ、玉ふと、豈驚くべき、恵ならずや、既に、道義の本元、眞理の源泉、智慧と、智識の根元、救ひと、恩の基礎、信愛、希望の根幹、本源なる、大能の主が、この土器に、伴ひ、玉

ふことある故に、信愛、喜樂、聖潔、生命、天真として吾人の身に成り、善人の性ど成り、吾人のものと成るなり、既に本源の主來り玉ふが故に、枝葉はこれより従ふあり、所謂キリストは神に立てられて、われらの義となり、潔とあり、智慧とあり、贖となり玉へりとは之をいふなり、吾人は之に於て、キリスト信徒外の聖賢人、孔孟輩の如き人と、キリストの聖徒とに、天淵の別あるを知る、彼等は、ボルソナの聖靈を知らず、復活のキリストを得ると云ふことを知らず、たゞ彼等は法を求め、道徳を求めたり、而して聖靈の誕生と、贖罪の血に由ざるが故に、復活のキリストを心中より受くる能はず、宿す能はず、これ根本を得て、枝葉自ら盛に榮ゆるの途に非ずして、根本を知らず、徒ら枝葉を見て、慕ふの途なるが故に、徹頭徹尾、修鍊と摸擬を以て成立ち、やゝもすれば、偽善の僻に陥るは、勢ひ免れ難き所なり、根を得るものは、枝隨つて來り、枝のみに目をつくる者は、枝をも得る能はず、少しく得るかと思へば、根なきが爲め、忽ち枯死す、人造宗教

の人が、一時勢力を得るが如く見ゆるも、久からずして、其勢に頓坐を來じ、必ず滅亡に至るは、之が爲めなり、真正のキリスト信徒は、愚に、小に、薄信の如くなるも、終に強大に至るは、亦之れが爲めあり、而して此萬徳萬善の本源なるキリストを身に宿らせて、自分の義と、潔と、智慧と、贖とをらしむるの途は、キリストの贖の血と、聖靈の誕生に由るの外、決して途なきなり、人或は贖なくとも、聖靈なくとも、活道徳を身に得ると云ひ、或は基督教外の聖賢君子も、キリスト教の所謂聖靈を得たるありと云ふと雖、是れ乃ち目薬おぎの盲目あり、模擬結晶と、有機生命の區別を知らざるものなり、松柏の種子と、蓬草の種子とを知らざるものなり、吾人キリスト信徒たるもの、幸福なること、道徳を模擬するにあらずして、聖靈の妙用によりて、キリスト御自身をして、吾人の正義、清潔、仁愛、諸徳とならしめ、玉ふ神の恵を得るに、あるあり、肉に由るものは、肉なり、聖靈に由るものは、靈なり、聖靈外に由て來るものは、悉く肉なり、よしや

潔き聖人の形体を以て来るも肉あり、主及び其大いなる能力よ由て強健になるは、キリストをして其心中の王とならしむるにあり、其心中の領分を悉くキリストに支配せしむるにあり、全心をキリストに支配せしむる時は、其他の付屬物は随つて悉くキリストの支配し玉ふ所となる、キリストを唯智識の上に受る勿れ、これ談話家、口上家となるもののみ、キリストを單に感情のみに受くる勿れ、是れやしもすれば、偽善者であるの途あればなり、キリストをして其心意を支配せしめよ、其全心を靈を支配せしめよ、是れ支那人や、猶太人たるを死れて、事實上に強大なる神の能力を有する良途あり、僅に呼吸して生命をつなぐ者となることなく、キリストの能力に満たされて隠と顯とにかくはらず、細大に論を、榮辱に關せず、時を得るも、時を得ざるも、主及び其大いなる能力によつて確實に、信實よ、忠義に、キリストの御命に従つて進むべし、世の空想家、講釋師の浮雲の說如何に頓着せず、キリストの生命と、聖靈よ由て、事

實上、正邪、善惡の戰、世と、肉と、惡摩との戰に於て、全勝利を取るべきなり、他人に慰めを與へんとし、おがら、自分よは慰めなきが如き、他人に糧を與へんと企て、乍ら自ら靈の生弱く、呼吸たえくにして、殆んど死せんとするが如き、口舌の說に雄にして、實際の命に怯懦あるが如きものは、速に來りて、能力の源なる、基督其儘を其全心の主とならしめて、強健なる能力に満たさるべきあり、

祈 禱

祈りて得られざるものなし、いのりは天の戸をひらきて、暗陰の門を閉づ、いのりの神に聖なる羈絆をかけ、天の使をとらへて、其祝福をあたふまで、去らしめず、祈は太陽をその進行の最中に呼ひ止め、疾風を吾人の使とす、其他雲の上、星の外にあるもろくの不思議力をも、みな一致してわれらの用をささしむあり、

狂の人

去年十一月下旬のことなりき、われ友達と共に本郷に住へる某氏を訪ねんとて菊坂のあたりに到りけるに、頭ハ蓬々として獅子の如く身に垢じみたるぼろくを纏ひ脊にはその容積二三斗入りの俵とも覺しき切包みを重々しげに負て、セッセと向ふへ行くものあり、往來の人も目をつけて願く様なれば、われらも不審と思ひ、少々足早に歩みて、彼者を過越し、其正面より彼を見しに、汗たらくと顔一面に鬚生ひ繁り、鬼ども人とも分け難き狂人にてありき、彼は狂人にして何處を指して行くともあくた、茫々として重荷を負ふて呻ぐならんが世に狂人にあらざる狂人多くは、其心其身に役せられ、醜態として何んの底止する所、奇人種々者あり、迷に神は來りて安着すべきあり、

人類の目的

前回に於ては、人類の中に含まり居る一個人に就き、彼等はめい／＼自由の分別力を有し、其分別力をして、いと高きよまします至善者則ち神明の大法に確と服従させ、其服従さする事が習とあり、性とあり、所謂人の自由力と神の大法とが、少も相衝突することなく、融然として合致するに到り、初めてこゝに眞正の自由あるものありとの旨を述べたり、本回は則ち人間一個のことに在りして、人類全躰のことも就て論せんと欲するあり、蓋し人間一個の事を云はんとする時は、勢ひ人類全躰のことを云はざるを得ざればなり、譬へば國會議員と云へば、勢ひ國會の事を云はざるを得ざるが如し、國會議員の何んたるを知らんと欲せば、國會ハ何んの目的をもて立てるものかを究めざるべからず、人間一個の何んたるを知らんと欲せば、到底人類全躰の目的則ち何んの意味を以て、此世に存在するものなるかを究めざるべからず、

◎暗路の光 (人類の目的)

さて人類といふ語の中には、現在此世界に生存し居る人間の總数と、人間始まつて以來今日に到るまでの間に死し去りたる幾億兆の人間と、今日以後人間世界の盡るまでに生れ來らんとする人間の總数と、此三つのものを含蓄するものと知るべし、そも、此人類は何んの目的を以て此世界に存在するものなりやとは、實に洪大無邊なる問題にして、今これを少しく詳言せば、人間の云爲する處は、實に種々雑多にして、或は子の親となりて、千々に思を焦し、或は親の子となりて一圖に孝養をこれ事とし、如何にして父母の心を安んせんやと、勤行絶間おきもわり、或は親の眼をかすめて、不義放蕩をこれ事とし、如何にして我身の感情を滿せんやと立ち狂ふもあり、或は人の夫とあり、或は人の妻となり、以てそれ／＼の働きをなすあり、或は軍勢の大將となつて、さん／＼に戦闘をなし、兵隊の生命を奪ふこと、土偶の首を奪ふより、輕きあり、或は其大將の旗下に兵隊となつて、其生命を奪はるゝこと、土偶の首よりも輕

しとせらるゝあり、或は漁師とありて、毎日／＼海の中にて働をなし、時としては難風に遭て、達島無人の郷に吹き流され、若くは野蠻人の手にあつて無慘の最期を遂げ、若くは海の藻屑とありて、誰れ用ふものもなく死するあり、或は火消となりて、火の中に轉倒りて死するあり、或は夫は車の前を曳き、妻は脊に子を負ひつゝも、其後より押し日暮すも、或は生れながらにして、富貴安樂の中に坐し、身に錦繡を纏ひ、口よ山海の珍味を食ひ、一生涯樂々として過すあり、或は生れ落ると、こもの上より育ち、橋の下、空屋ののきしたに起き臥し、食や食すに路頭にさまよひ、終に飢寒身に迫りて死するありといふ有様あるが、彼等の全躰は、如何なる主意目的を以て爾が生存するものなりや、之を大ひにして云へば、我日本の歴史に徴するも、上古は神代と謂つて、もろ／＼の神等、此國の政事を司り給へりといふ、然るに事終一變じて、天皇となり、天皇躬ら萬事を統べ玉ふ事となりけるに、源の頼朝、頼朝府を鎌倉に開

きてより國家の政權は武門の手に徙り、世は益々源家のものと余りたり、然るに幾程もなくして北條氏の手に徙り、北條亡びて足利氏起り、足利の末世終に天下は戰國の代とあり、大亂數を盡むて漸く織田氏、足利の後を襲ぎて立つよと見しが、忽ち光秀の爲めに弑せられ、光秀は三日天下にして豊臣氏に亡ぼされ、豊臣氏僅に二代にして徳川氏に亡ぼされ、徳川氏三百年の治世の後世は明治の維新となりて、天下は元の人皇に立歸へり、天皇躬ら萬機を統べ給ふ事とはなりたり、實に觀じ來れば、人間界の出來事は、千態萬狀筆にも口にも盡し難き程にして、所謂紛々雑々、殆んど歸着する所なきが如くにして、而も亦自ら一貫の主意目的あつて存するが如し、果して人類は目的を有する者なりや、人類の歴史は果して主意あるものなりや、とは實に洪大なる問題にしてこれに就ては古來いろいろの答案も提出せられたりと雖ども、こゝに之を記載するの餘白を有せず、故に直ちに直ちに進んで余輩の信ずる所を述べんと欲す、曰く

人類歴史の主意は人類の教育にあり

夫れ人類の初めて世よ出るや、何んの苦勞も知らず、又安樂も知らず、唯飢を感ずればあたり山にて菓物を採り、渴を覺ゆれば川に入りて水を飲み、暑ければ裸躰、寒ければ木葉もて身に着すと、いふ位の事ありしあるべし、然るに次第に人數の殖るに従へ、次第に天然物のみにては不自由を感じ、強きは弱きを凌ぐといふ腕力沙汰にも及び、かくてはとて弱き者は熾興を結びて強きものと暴力に當る等、其他次第に器械の發明、耕作、牧畜の業も起り、義理人情の風習も生じ、云は、困難を経る毎に、變動に逢ふ毎に人間はますます智慧を得、能力を磨き、今日の文明に到りても、尙止む處を知らず、いよく出ていよく進まんとはあらずあり、故に人類歴史の主意は、要するに人類を教育して、其本來の面目を發揚せしめ、以て自他の幸福を全ふせしむるにありと謂はざるべからず、

或人之を難じて曰く教育とは某てふ一個人を教育すといふに於て其意味あり同一の人が過をなしては懲しめを受け懲しめを受けては改心をなし改心をなしては其報の福を受け若くは同一の人が愚より賢より無智より有識にと云ふ順序にて初めて教育の主意は立つあり則ち善き事も悪き事も其當人一人の身上に應報するの時に於て教育の主意は立つと謂つべし然るも一個人を離れて別に存すべくもわらざる人類一個人の總計を指して名づけたる人類而して一個人は歲月と共に古は死して新きもの生れ其新きもの亦古くなりて死し其次の新らしきもの之より代り次から次へと入り替り立ち替り已が蒔たる種を已自ら種ること能はずしてこれを子孫に残し子孫は又これを子孫に残して善き事にも悪き事にも其應報の歸着其當人の上にヒタリと報ひらる事なく却つて罪なきものに意外の苦痛來り罪ある者に物怪の幸運あることもありて所謂天道是かど非かの歎を發せしむるが如き人

類にして豈教育の主意立つと謂ふべけんや例へば西郷の戦亂に際し田原坂の險其他の要害に於て多くの者は一命を落して空しく草頭の露と消たり勿論これが爲めにわれらは今日の昭代を謳歌して喜樂の上もなき事なりと雖ども而もかの田原坂の露と消にし當人等は今は全く空々寂々の中に入りて何等の感もあらず何等の喜樂もあらず今日の太平ある事だに得知らずして全く苦難の仕損なり當人一個にとりてはかくても尙教育の主意立つと謂ふべけんやそれ一個人を離れて人類をき以上は一個人にとりて何等の應報なきも人類全體の上にて應報あるが故に足れりせよとの論は立つべからず如何となれば個人利益と人類全體の利益とが相反すればあり一個人に反するの人類は眞の人類にあらずして人類といふ空想のみ此る空想は何をも知覺し何をも經驗すること能はず尙は何んぞ教育と云んや空想的の人類は歴史の主人公とあるお足らざるものあり或は辨じて一時代の人

類と他の時代の人類とを比ぶれば、大いに進歩するものあるにあらざるや、中世暗黒時代の人間と、十九世紀末期の人間とを比ぶれば、これはか
れより大進歩をさせるにあらざるや、と云はんかおれども、これ以て何等
の解明とあらずに足らず、それは暗黒時代の人は、十九世紀末期の人の進歩
したるが爲に、毫厘の幸福も其身に受る能はず、矢張暗黒時代に生れた
る者は、それ丈けの損をなしたるに外あらざればなり、譬へば僅かに教
育の初歩を受つゝありしに、早くすでに死界に退隱させられ、引き代り
て新來のもの召し出され、其新來の者も僅かに初歩より少し進みたる
教育を受けし頃、亦他界させられて、他の新來者と交代す、之を言ひ更
れば、同一人の學生が不完全なるより、完全に取り替らるゝにあらざし
て、僅計り教育を受けたる學生が、他の學生の教育のため、除去せらる
といふ有様なり、かくて、如何にして教育の主意立つ事あらんや、且又
これを同一時代に於て見るも、同じく此説の困難なるを知るに足るべ

し、試みに一觀せよ、何れの時代に於ても、其時代の人間が悉く同様の程
度に文化の恩を受けざるや、といふに決して然らず、ささにも云へる如
く、非常なる不幸不運、非常なる弱しき肉體と汚れたる靈魂とをもち、不
義不徳、無智文盲の中に沈淪せるものと、一方には、富貴榮耀身に餘り、精
神も明快、肉體も丈夫に、萬事に幸福の地位に在る者と相混合して居
るは、社會の現狀にあらざるや、人類てふ一大川流は、其川流全體の分子悉
く同一の速力を以て流るゝにあらざるや、却つて其大多數の分子緩々、
たる速力を以て流れ、動もすれば停滯して汚穢するの有様たるあり、而
して其生命と活力とを以て流るゝ部分の、實に細々小々のものたるに
すぎず、或は時として此部分の大いに廣まるが如き觀あり、雖ども近
づきて見れば決して左にあらざるや、これを要するに、もし歴史の目的をも
て人類の教育にありとせば、人生は全く小數者に對するの賜ふし
で、多數者はすべて此小數者の犠牲となるものなり、これ何んたる不都

合なる事ぞや犠牲的精神は甚だよしと雖も、全株の分子が皆それ
 意味を有ち、價値をたもちてこそ犠牲の精神も貴かれ、もし個人よ
 して自個獨占の目的もなく價値もあくんば、ろが犠牲とありたりとて、
 何んの貴き事かこれあらんや、嗚呼歴史の主意は終に親ふべからざる
 が人類の目的は終に究むべからざるか、曰く何んぞ必ずしも然らん、請
 ふ聊かこれを論せん、

福音の棗

○余が死なざりとは信せしが故なり

井上文慈郎

ダバデの書に於て今日と云り、前に云し如く、今日もし其聲を、
 ば爾曹心を剛愎にする勿れ(希伯來書四章七節)

イエス曰けるは、手を犁に着て後を願る者ハ、神の國に當ざる者
 あり(路加傳十章六十二節)

過る年、八王子教會が余を牧師として招聘せし時、余は未見の地なれば、
 家族を東京に残し置き、一身一ト先ツその觀迎會に出席し、住居等も見
 定めし後、再び家族を引き纏め、移轉せんとの返辭を差出したる、蓋
 の月十五日は觀迎會あれば、十五日十六日同地に留まり、十七日午前出
 發の馬車にて歸京せんとの預定ありしなり、然るに同教會よりの請求
 には、是非共觀迎會には家族引纏め出席呉られたし、との強ての手紙な
 れば、余は神に祈れり、神よ今は連日の梅雨にて荷物の運送に不便なる
 のみならず、問屋の謂ふ所に依れば、玉川の出水は川留めとあるに至れ
 り、どの事なり、然れども一人にして行くと、家族と與に行くと、何れか神

福音の棗

(余が死なざりとは信せしが故なり)

の御旨なるやを我に教しへ賜へ固より我意の儘をなさんとするに非ずキリストの名に依て禱るありア「メン」と然るに余の本心は聖靈に導びかれて「ダビデの書に於て日を定めて今日と云へり前に云し如く今日もし其聲を聴かば云々」又手を率に着て云々」どの文字に覺醒せられ直ちに準備に取掛り十五日の観迎會には家族一同出席したり嗜アもし誤つて教會の請求の如くせざりしならば十七日午前の馬車に乗じたる余は立川驛の瀛車と衝突して慘酷なる死に方を成せむならん當日余ハ目撃せり彼の馬車は寸裂尺破して六人の乗客の肉飛び骨砕け了ぬ有様を！

◎造化の妙旨

爾曹天空の鳥を見よ稼ことなく穡ことなく倉に蓄ふることなし然るに爾曹の天の父は之を養ひ玉へり爾曹之よりも大に勝

るものあらすや(馬太六の廿六)

不信者と目を以て此等の語を讀むも心を以て誦せざるが故に人を怠惰者にするの文字ありなど嘲ける者あるは以ての外の卑がごと也鴉にても雀にても朝起の活潑なるを見よ啞々と呼び嗚々と叫ぶも各々皆造化の御旨に違がふて働らくこと實に感心を者あり雀百まで跳舞忘れぬどの諺を文字通り解して雀が朝のら晩まで遊んで居ると思ふは大なる了見違ひ也余ハ子供の時、黄鳥を飼ふことを好みしが、小鳥屋の主人の口授に従がい、焼き鮎米の粉菜の葉等を目方に掛けて日々摺り餌を調製り與へたれども、人工はとて天工の萬一にも及ばず死に至らしめしもの甚だ多かりき然り誰か能く過慮て寸陰の生命も延べ得んや肝要あるは造化の御旨に順がふに在り。

◎福音の英

(余が死すべしに信せしが故なり)

題一千八百九十五年第一週祈禱表

井上文慈郎

說教 一月六日、日曜

惟侍耶和華者將獲新力。

欣々齊仰萬軍王。柔順如鳩亦當狼。

好把移山祈禱力。併夫天佑試鷹揚。

祈禱 七日、月曜

謙遜與感謝

狐疑醜態誤天真。幾使英靈歎蒙塵。

今是昨非安息後。一齊感謝々聲新。

祈禱 八日、火曜

爲靈播者爲靈獲。 春雨秋風渾適宜。

家庭の友

半兵衛の夢噺

k i 生抄譯

萬丈の高峯雪に聳え頂には常に千歳の雪を貯ふ此山麓に清雅なる一軒の農家あり浚々たる溪流山復より出で、屋後を繞り芳花爛熳たる庭園屋前を擁し緑の野邊へ遠く連りて一望際涯なし和光長閑に照して満目の美を現はし薫風除に來りて神氣快然たりかゝる風光明媚なる所に建てる家の主人は名を半兵衛と云て其年八旬に余る老人ありされど猶壯健にして勞動に怠なく田を耕し花木を培養し撓まず働さ居たり氣候温和にして早もなく霖雨もなく收穫は年々豊かにして幸福のみ打續けり壯年の頃娶りし妻は今に強壯にして諸共に農業に従

爲、鑿播者爲、豐穫。 春雨秋風渾適宜。

高丈の高峯雪に聳る頂には常に千歳の雪を貯ふ此山麓に清雅なる一軒の農家あり溪流山復より出で、屋後を繞り芳花爛熳たる庭園屋前を擁し緑の野邊へ遠く連りて一望際涯なし和光長閑に照むて満目の美を現はし薫風除に來りて神氣快然たりかゝる風光明媚なる所に建てる家の主人は名を半兵衛と云て其年八旬に余る老人ありされど猶壯健にして勞動に怠るく田を耕し花木を培養し撓せず圃に居たり氣候温和にして早もなく霖雨もなく收穫は年々豊かにして幸福のみ打續けり壯年の頃娶りし妻は今に強壯にして諸共に農業に従

家庭の友

半兵衛の夢噺

k i 生抄譯

高丈の高峯雪に聳る頂には常に千歳の雪を貯ふ此山麓に清雅なる一軒の農家あり溪流山復より出で、屋後を繞り芳花爛熳たる庭園屋前を擁し緑の野邊へ遠く連りて一望際涯なし和光長閑に照むて満目の美を現はし薫風除に來りて神氣快然たりかゝる風光明媚なる所に建てる家の主人は名を半兵衛と云て其年八旬に余る老人ありされど猶壯健にして勞動に怠るく田を耕し花木を培養し撓せず圃に居たり氣候温和にして早もなく霖雨もなく收穫は年々豊かにして幸福のみ打續けり壯年の頃娶りし妻は今に強壯にして諸共に農業に従

事し男女二人の子供ありて國中尋ぬるも他に類を見ざる孝行者あり
 殊に女子は容姿艶麗にして國王の姫君としても毫も耻しからぬ風情
 ありきされども満れば飲るゝ世の習かゝる不足なき幸福も忽にして
 削り取らるゝ如き有様となれり夫を如何と云ふに某日半兵衛の妻は
 半里程遠き知人の許に客に呼ばれ出で行途中少し風を引し如くなり
 しが漸々重りて遂に熱病と變じ數日の後歸宅せし時には己に恢復の
 望なきに至れり

二日の後妻の棺は早墓所に運ばれたり半兵衛は消然と墓の傍に立ち
 て式終るも去り得ず二人の子供も共にありしが悲の余りにや家に歸
 りし後氣分悪しとの事故下女は貯への薬品を取出し來りて二人に與
 へぬこれ大變なる間違よて其薬品は毒薬なりしこと後に心付きたる
 も今は如何ともすること能はず二人共毒の爲に遂に死去せり半兵衛
 は茫然として氣を失ひたる如く泣々葬式は済せしものゝ重ねゝの

不任合にで落膽の余りにやまるで此世の中の凡ての樂凡て望も其代
 墓に埋めし如き心地せられ今は自身の頭髮さへも梳る力なく清朝さ
 る日光も心を思むること能はず澄み渡る月を見れば唯に哀を催すの
 み思へば神様の御支配と云ふ者は難有はかい世の中は只運ばかり遇
 成が一番よろしい神様の統御をばいらぬものと考へけるが又思返
 せば遇成と云ふものは極めて覺束なきこと如何なるものやら成つて
 見なければ解らぬもの故之も當にはならぬ只願はくは來世には神様
 が死生などの如き定まつた法則を以て支配をされぬ處へ行きたいも
 のなり神様の智能も私には少しも難有くまい宇宙間には神をどの無
 い方が余程よいかと種々考へ日夜鬱々として暮し居たり
 庭の中央に美しき棕櫚の大木ありて其下に椽臺の設けありこは亡な
 りし子息が作りしものなり子供の葬式の濟みし後二日目の夕方半兵
 衛は此椽臺に倚つて四方の景色を眺め居たり前は目の達かぬ程曠然

としたる田畠にて緑樹是處彼處に茂り夕日は漸く山の端に傾きて蒼然たる暮色遠くより來り清き月影は早く東天に差出て入日の黄金色はいつるか月の銀色と變りはじめぬ

半兵衛はこの美しき景色に暫時は何事も打忘れて眺め居たりけるが又た兼ての悲み心の内に浮ひ來ると共に鬱々となりて目前の美景は心より消る失せ只吾身の不幸不運を嘆き神様は何とて加程まで不仕合にのみ逢はせ給ふかといろ／＼考へをる内夜も次第に更行きて不知／＼其儘眠を催せり不斗目覺めし如き心地して當りを見るに今迄ありし山も川も花園も皆其影跡を失ひて全く變りたる一の新世界とありぬ

半兵衛は立上り彼方此方と歩きまゐる内向ふより一個の動物歩み來る様なり猿ならんと思ひ居たるに漸々近く程によく／＼見れば猿よりはあらで形体いと見惡き怪しげなる人間なり半兵衛は先づ言語をか

け此所は如何ある所にして又た吾は如何にして此所へ來れるか教へよと云ひけるに怪物答へて云ふ様吾は御身が如何にして此所へ來られしか知らず此所は遇成世界と申て吾等如き人々の住居する所なり此所にては凡事皆遇成なるによりかく名付られぬ半兵衛は此答を聞て悦び心に思ひけるはるも遇成世界とは吾の常に望みし所なりさるにても若し吾以前より此世界に住しからば愛らしき二人の子供も生者必滅なごし云ふ定理に従ひ死せず去て居らんものをと悲みけるが更に問ふて云ふ様それならば何卒御身案内して吾に此世界を見せてもらひたし乍去猶聞き度事は此所には眞に神様と云ふ者が無きか又た御身達を束縛する法則もなきか尋ねけるに怪物不審なる顔付にて答けるは神様と云はるゝはるも如何なる者か吾には分らず此所には其様なる者一つもなく萬事皆遇成にて生ずるのみ今一々見せ申せばよく御分りになるべし

かくて半兵衛は案内者に連れられて行く中種々ある奇物目に止まれ
 り地に生へたる草を見るに緑なるあり赤きもあり白きもあり芽を出し
 たるもあれば色に霜枯とありたるもあり或は上の方に根を持ちて倒
 び生べたるもあり其順序規律等少しもなく只亂雑ののみなり也
 然る状況を現はせり
 果物畠に立止りて眺むに茲より遇成の働きを見へて美麗なる林檎の
 大樹には大なる胡瓜果々と下り一つも林檎の實を見ず挑の木に大
 なる蒲盧杖も折るゝ斗り重げに實を結び怪物云ひけるは此等の植
 物の實は種々に變化するを以て前より知る事能はず假令へば今年蒲
 盧の實を結ぶ木にして明年芋藹の實ありあり皆之れ遇成の働に
 此世界まで少しも珍らしからぬ事あり
 半兵衛は奇異の思をさし尙も彼方此方と眺め廻る内又一人の遇成
 國人に出會けり其容姿を能く見るに両足各々其長さを異にし一足に



は膝蓋なく一足は脚目を有せず耳は各々両肩の上に生へ頭部は凡て
黒色の厚き布の如きものにて掩はれ眼を現はさる故手索りよて歩
みゆけり半兵衛呼び止めて御身は何頃より盲目となりしやと尋ねし
に彼の人答へ云ふ様否やとよ吾は盲目はあらず吾此世に生れし時
如何なる譯やや眼球裏返しにありて瞳孔は内を向き後面は外方に轉
せしありされば日光を望む時ハ其若痛耐へ難ければ止を得ず如此常
に覆を用ひ居るなり半兵衛重ねて問て曰く去れども何か見ゆるあら
ん目の内部の状にても見ゆるあるべしと云ひしに實に仰の如くなれ
ども内部は暗黒して光線かければ見え難し吾に一人の兄弟あり彼は
完全の眼を頭の頂上に一箇持ちたれども上方に向ひ開きをれば常に
空斗見ゆるのみ殊に日光の直射を受くるを以て晝の内は大抵開き居
ること能はずされども其眼は自由に閉き難き眼あれば常に困難を
ありと語り畢りて又た探り行けり

半兵衛は案内者に導かれ牧場に至りて種々なる動物を見るに足の三本なるものあり胸の中央に頭の付けるものもあり或は全身長毛に掩れて其形を現はさざるものあり又は半身馬にして半身牛あるものあり鳥の子に駱駝あり羊の群の中に象も加えり草を食ふ馬を見れば口は獅子あり馬の蹄を生したる駝鳥あり見る者一つとして奇ならざるはあし之皆遇成によりて現出したる者あればなり半兵衛は此所を見終りて去らんとするるとき飼主出て来り語りけるを斯く數多の能き動物を飼ひ持たれば幸福なるものと思召さるゝならんされども又た知らざる困難の伴ふあり假令は彼所に臥せる牡牛へ見掛甚だ美しくしけれども乳を搾る事能はず唯温き湯の如き者を出すのみ又た大なる眼珠を持つも開盲にして少しも見る事叶はざる動物あり或は日光に居る事能はざる種類あり大抵は邊にして聞へざるあり且つ一匹毎に食物異なるを以て之を飼養するの困難云ふべからずと語る内忽ち四方

暗暈として闇の如く又た一物の目に見ゆるなし半兵衛大に驚きこの如何あることかと尋ねしに案内者答へ云ふ様否別に不思議なることにあらず驚き給ふ勿れ之れ大陽の入りし故あり此國にては常は大陽の出没定まらず出づるも入るも其時次第なり場合により或は一月も没失ことあり又た時により一週位又或時の數時間にして再び昇るあり今日は多分間もなく再出すべしなど言ひつゝ進み行く程に嘻しや俄然明々たる日光輝やき初めぬ其射出の迅速なる電光も雷あらず半兵衛は不意の射照に逢ひて一時は目暗み両眼を手にて掩ひ立けるが稍心地付きて除々と目を開き眺むるに赫々たる大陽燦然として照り渡り其美麗なる光彩未だ曾て見し事なし熱度は頗る増加して蒸くが如く火風吹き来て炎熱恰も窟中にあるが如し飼主苦熱に耐へ兼ね聲を上げてあら熱や今將に蒸死せんとす吾が家畜も多分は生ること難かるべし大陽は前より一増近きに現れたり鳴

呼早く日の入りて更に適度の距離に出現せばよきにと云へり
 今は日光直射して酷暑戸外に耐へ難ければ日蔭に憩はんものと皆々
 屋の内に退きぬ半兵衛つくゝ家の構造を見るに素雑陝隘にして到
 底己が住家に比較すべくもあらず暫くにして主人は食事を調のへ運
 び来れり半兵衛膳に向ひ人々の食事の状を見るに各自異種なる食物
 を控へ一人として同種類の食物を食ふものおし半兵衛之を怪みて其
 隣を尋ぬるに皆々答ふる様此國の人は食物各々差異あり假令一人に
 適する食物ありとも他人には返て毒となる一人の口には美味云ふべ
 からざるも他の人の口には悪臭嘔吐を催すが如きあり
 斯くて面々食事を終りけるが半兵衛は今は何となく心に悲を催ふし
 先きに住める世界の有様は思の内に残れども夢の如く過ぎ去て跡方
 もおし先には神も在まらず司法者もあく只遇成に起り遇成お終るて
 ふ世界に生れんことを望みしお望叶ひて今居る所即ち夫れなり今よ

り后は此世界に住まざるべからず住み馴れし前の世には美しくしき
 の野邊隈なき月の光春の朝秋の夕數々の眺め尽きざりしに今此遇成
 世界かゝる放任亂雑なる所にては如何でかざる樂のあるべき去りと
 ては吾ながら如何なる心なれば神の能力を難じ御恵みを輕んせしぞ
 誤まれり誤まれりと歎げき悲しみ此上は只管神の御死を願ひ祈して
 一時も早く元の世界に送り歸へして給はらんと涙の中に祈り初めけ
 るが思へば此所は遇成世界本より神の在しますことなし誰を當に祈
 りせん早願ひべきもの絶てなし如何はせんと又た涙に暮れ其儘第れ
 果て何時しか眠りぬ
 不斗目覺むれば其身は依然棕櫚の木の下の様臺に臥せり見れば今は
 明方あり東天紅を染め旭日輝き昇りて満目鮮々たり草木清新にして
 色更に緑なり花は梢に笑を含み鳥は樹間に聲を弄す其清快の氣洋々
 たる状古のエデンの花園も斯くやと斗り思はれたり

半兵衛は思はず喜び叫んで起き上りつゝ此所は最早遇成世界にはあ
 らず慥に神の造り給ひし元の世界あり即ち跪きて天地の造主凡て
 の法則順序の本源なる神の前に吾不心得を細さに慚悔し全く生れ變
 りし人の如くなりて妻や子供の事は思へば涙の種故かゝる事は一切
 打忘れて唯慈善の働きを爲すことを務め親類より似合しき夫婦養子
 を爲して家督を譲り以前に優る樂しき一家を作して倍々富み榮へけ
 るとぞ

一寸一言

問 神を愛するとの如何なることで御座りますか、

答 神をうやまいて其聖旨を守り、また己の利を求めずして、人の益を

圖ることでありませす、

問

拙者生得短氣ものにて、腹立つ時の後前を見ず怒り罵り科なき諸
 道具までも投げはゝり、杖棒を振上げたり、拳に息を吹きかけたり、
 燃立つ時の火に入るも知らざる程となれども、ろろく短氣しつ
 まれば其後悔も亦甚し、何んとか基督教によりて之を癒すの法ハ
 ありますまいか、

答

短氣ハもと氣儘といふ病であります、氣儘ハ世間を知らず、そのが
 狭き小き了見にまかせて、たゞ我身勝手則ち己の利を求めて、
 人の益を圖らざるにありませす、さればこれを癒さんとするにハ、ひ
 たすら神を愛して其廣らかに裕なる御心を味ハるべし、

問

私ハ一兩日前金を少々失いました、若し覺違ひもやと思案の底
 をたゞし紙屑籠までさがせども更に見ず、かれこれ思ひ廻すに疑
 しき事ありて、潜に心を付て見るに、其人の顔色起居振舞に至るま

で儘に此人の仕業とは見へながら、これと云ふ証據もなし、何んとか之を判然と知るの法ありませうか、

答
ものを失ふ本心、まづ我本心を失ふにありませうれば、人を疑ふことハ決してなりませぬ、よく本心にたちかへり、愛を旨として寛忍を志し、凡そ事包容み、凡そ事信じ、凡そ事望みをれば、あるものならば出で來り、おきものなるも、人をいためず、己が徳を害いませぬ、これが督基教の疑に處する法であります、



明治廿八年一月廿六日印刷
明治廿八年一月廿九日發行

東京市麴町區上二番町十二番地

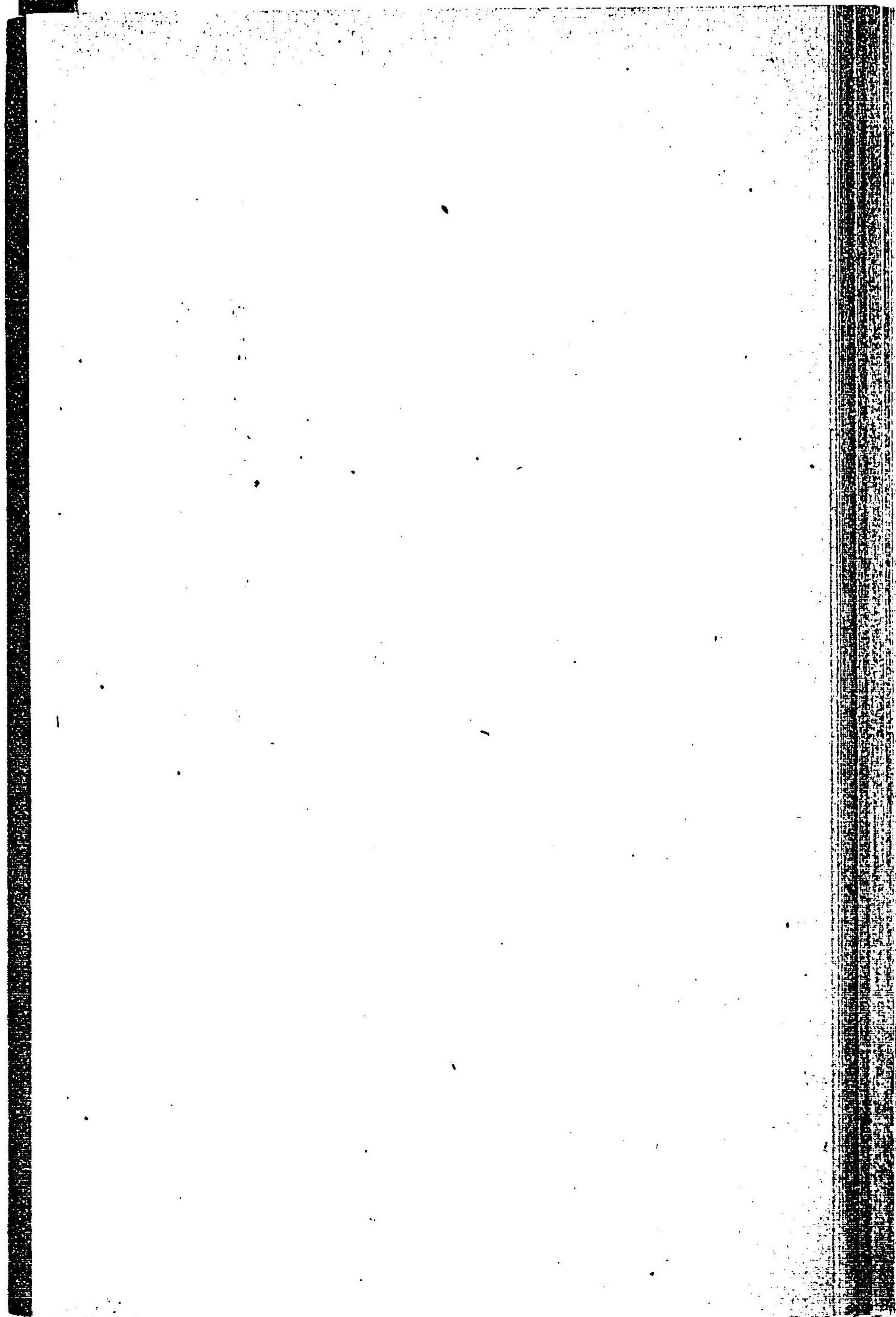
發行兼編輯人 松尾音次郎

同 牛込區上宮比町四番地

印刷者 富永寛容

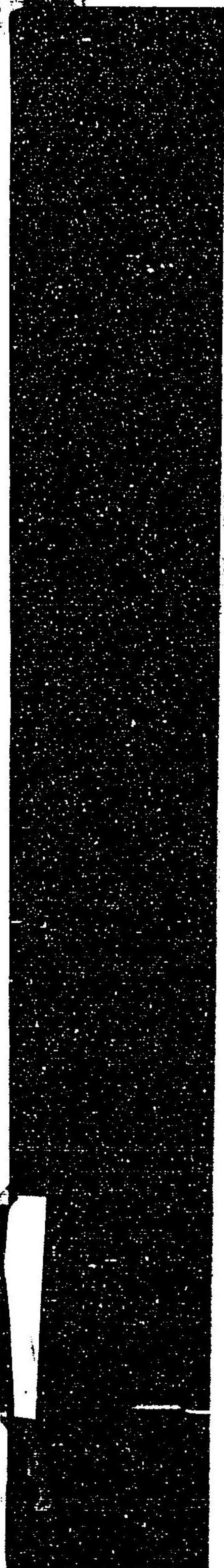
同日本橋區北島町一丁目廿三番地

印刷所 和合社



9-93

)
三
日
十
月
十
日
三
日



基督教の礎

国立国会図書館

特

8